

毎日新聞 2016年6月4日



小説『日本三文オペラ』に登場する新世界に立つ作家の島田雅彦さん。奥は通天閣＝大阪市浪速区で、三浦博之撮影

兵器工場の跡地で鉄材を盗む集団を描く開高健(かいこうたけし)『日本三文オペラ』。痛快で、悲しみも満ちる。その舞台を作家の島田雅彦さんが訪ね、現代に接続してもらった。

敗戦後「兵どもの夢の跡」

『日本三文オペラ』の冒頭で開高健が列挙法と饒舌(じょうぜつ)体を駆使して活写したのは、戦後のどさくさが残る新世界(かいわい)だったが、この魔窟を久しぶりに歩いてみると、私が初めて訪れた一九八二年頃にはどの通りにもあふれていた猥雑(わいざつ)さ、生活臭、場末感などがいくらか薄まり、人工的なけばけばしさが増し、テーマパーク化が進んでいた。もともと明治期にパリを模した博覧会都市として設計され、通天閣や動物園、美術館のある西の浅草ともいうべき娯楽の殿堂だった頃に回帰した感もある。その後、空襲で焼かれ、闇市へと移ろった新世界には明治から現代にいたるまでの都市の諸相が刻まれている。

空腹を抱えて「ジャンジャン横町」をうろつくフクスケがモツ井一杯でスカウトされ、旧大阪砲兵工廠に埋もれている鉄(てつ)屑(くず)を盗み、生計を立てる盗賊集団に加わる導入から、筆は走っている。

「アパッチ族」の猛者たちの群像はおもしろい人が一番尊敬される大阪ならではの列伝となっているし、警察権力との攻防戦のくだりは『水滸伝(すいこでん)』の梁山泊(りょうざんぱく)やパリ・コミュニケーションを思い出さずにいられない。大阪下層階級のバイタリティと無節操さが横溢(おういつ)し、罵詈雑言(ばりぞうごん)、隠語、猥語、差別語が飛び交う集落の内部に詩人金時鐘(キムシジョン)、作家梁石日(ヤンソギル)の案内で飛び込んで行った開高は、後にベトナム戦争を取材した『輝ける闇』につながるルポルタージュ的手法を獲得した。取材当時、アパッチ族はまだ現役だったが、それから間もなく、パリ・コミュニケーションのように陥落したので、本作は大阪アパッチ集落の誕生から滅亡までを描いた「盛衰史」となったのだった。

戦後社会の理想と現実の解離は当時のインテリ、学生たちをおおいに屈折させていた。障害者や高齢者、男女の差別がない原始共産制のような小集団・アパッチ族の生活ぶりや反逆精神に、ナイーブに体制の転覆を信じていた知識人たちは溜飲(りゅういん)を下げただろう。開高は第二章でキムという登場人物に「いっさいの拘束から自由にあなたははたらきたければはたらき、飲みたければ飲む。どんな放恣(ほうし)な生活もここでは許されている」といわせているが、そのような共同社会が都市の只中(ただなか)に現実に存在していたこと自体が奇跡だった。

本作では、ほとんど都市伝説としか思えないようなエピソードとキャラクターが次々と紹介されるマカロニ・ウエスタンのようなてんこ盛りの活劇的構成と、集落とはやや距離を置き、背景事情や顛末(てんまつ)を淡々と語る報告書的な書き方が混在している。

前者の書き方は作者の集落への強い思い入れと、そうした集団を育む土地柄への愛着がベースになっているが、後者のスタンスには、その共同体が取材から間もなく壊滅させられたことへの幻滅の反映がある。

<メモ>

「東洋最大の兵器工場」だった大阪の旧砲兵工廠(しょう)は、終戦前日の1945年8月14日、米軍の空襲で廃墟と化した。近くに住む無頼集団「アパッチ族」は差別なく役割を分担し、綿密かつ大胆なチームプレーで鉄材を運び出して換金する。だが警察の取り締まりに追い詰められていく。

無能な為政者を笑い飛ばす本書は59年刊。開高は58年『裸の王様』で芥川賞受賞。後にベトナムの戦場などを取材した。作品に『輝ける闇』『夏の闇』など。